

目次

はじめに——ややこしくも豊かな国際関係へのいざない

森平雅彦

8

第1部 古代

第1章 古代史の概観

34

第2章 二正面作戦を回避せよ！

——古代東アジア世界における高句麗の外交・軍事戦略

井上直樹

49

第3章 拝借とオリジナルのあいだ

——5・6世紀の百済における南朝將軍号と官位

井上直樹

73

第4章 国内統合とディアスポラ

——統一新羅の統合政策と百済・高句麗遺民問題

植田喜兵成智

100

第2部 高麗時代

第5章 高麗時代史の概観

128

第6章 地域限定の天子？

——高麗の君主は皇帝なのか王なのか

森平雅彦

140

第7章 「華風」好みのリアリスト

——高麗王朝の外交と文化意識

豊島悠果

167

第8章 はじき出されず、呑み込まれず

——モンゴル帝国の覇権と高麗

森平雅彦

198

第3部 朝鮮時代

第9章 朝鮮時代史の概観

232

第10章 侯国外交のアポリア

木村 拓

246

——朝鮮王朝の事大と交隣の両立

第11章 忘れられた真実

鈴木 開

271

——朝鮮・後金関係と「交隣」の行方

第12章 外国商人は入るべからず

辻 大和

296

——朝鮮後期の国際通商

むすびにかえて——そしてゞややこしさゞは続く

森平雅彦 315

あとがき

森平雅彦 320

主要参考文献

324

執筆者一覧

333

はじめに——ややこしくも豊かな国際関係へのいざない

森平雅彦

馴染み薄い朝鮮の歴史

19世紀末に近代をむかえる以前、すなわち前近代の時代、朝鮮半島に存在した歴代王朝は、どのような国を形づくり、周辺の諸国・諸民族とどのような関係を結んできたのだろうか？

現代の日本で、そもそも大半の人は、具体的なことをほとんど知らないのが実情だろう。

もちろん学校の歴史教科書では、世界史の一部、あるいは日本と関係が深い隣国として、いちおうは触れられている。しかしそれは、ごくわずかな情報でしかない。日本の通史を語るのに、登場人物は源頼朝、足利尊氏、徳川家康、ほか数名ですませるといったら、読者のみなさんは「そんなムチャな！」と思うにちがいない。しかし、そんな「ムチャ」に近い形で書かれているのが、日本の歴史教育における朝鮮史なのだ。そこから体系的で深い理解を得るのは、どだい無理な話である。わずかに得た知識も、卒業とともにではなく消えていくのが世の常だ。近年では、歴史を素材にした韓国ドラマも日本で数多く放映されるようになった。それを通

じて朝鮮史のイメージを持つようになった人もいることだろう。しかしドラマはあくまでフィクション、小説の世界である。見映えをよくし、ストーリーを盛り上げるための演出として、さまざまなデフォルメが加えられている。これに対して歴史の歪曲わいきょくだと目くじらを立てるむきもあるが、それなら日本の時代劇などに対しても同じことを言わねばならない。そこは視聴する側に簡単に真にうけない思考力と判断力、メディア・リテラシーが求められるところだ。

前近代朝鮮の国際関係に対するイメージ

一方、学生時代に歴史の勉強をがんばって、それなりの知識がのこっている人、あるいは比較的人気の高い日本史や中国史関係の本を読み、それとの関連で朝鮮史についても多少の知識があるという人に、朝鮮史はどんなふうに見えているのか？ おそらくそれは、次の①～③のような印象ではないだろうか。私が大学の一般教養の授業で受講生にアンケートを取ると、文系・理系を問わず、「印象なし」以外ではだいたいこういう返事がかえってくる。

- ① 外国や異民族から繰り返し侵略や干渉をうけてきた。
- ② 中国を頂点とする国際秩序のなかで中国に従属していた。
- ③ 漢字や儒教に代表される中華文明を尊んできた。

表1 前近代の朝鮮を襲った大規模侵略

BC108年、漢の武帝、衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪郡など4郡を置く
244年、魏の武帝母丘儉、高句麗の王都国内城に侵攻
342年、前燕の慕容皝、高句麗の国内城に侵攻し、王陵をあばく
660年、百済、唐・新羅連合軍により王都泗沘を落とされて滅亡
668年、高句麗、唐・新羅連合軍により王都平壤を落とされて滅亡
1010年、契丹、高麗の王都開京に侵攻し、王は南西部へ避難
1232年、高麗、モンゴルの攻撃を避けて江華島に遷都
1361年、紅巾軍、高麗の王都開京に侵攻し、王は南東部へ避難
1592年、豊臣政権の日本軍、朝鮮の王都漢城を落とす
1627年、後金、朝鮮に侵攻して王都漢城に迫る
1636年、清、朝鮮に侵攻し、翌年、南漢山城で王が降伏

まず①については、たしかにそういう事実がある。上の表は、前近代朝鮮において国都が外国の軍事的脅威に直接さらされた深刻な事例を一覧にしたものだが、平均すると150年に1回くらいのペースでそうした事態にみまわれている。日本が外国の軍隊に国都を占領されたのは第2次世界大戦の敗戦時くらいだから、状況が大きく異なる。

②についても、後述のように「従属」と語られるところの中身に注意する必要があるが、朝鮮半島で国家が形成されて以来、中国との関係においてそのような「形」が継続的にとられてきたことは、大枠において事実である。

かつて日本の歴史学界では、古代史を中心に前近代東アジアの国際社会を理解するキー概念として、冊封体制論が一世を風靡した。文明の中心で

ある中国から見て「夷狄^{いでき}」（野蛮人）に位置づけられる周辺の諸国・諸民族の首長が、至高の存在である中華皇帝の徳を慕うという名目で使者を送って貢物を捧げ^{こた}（朝貢）、皇帝から王・侯などの爵位や官職を授かって君主としての立場を承認され、その臣下になる（冊封）——このような中国を上位・中心とする華夷^{かい}秩序を軸に東アジア世界の国際関係が形成され、さらにはこれを通じて中華文明が周辺世界に伝播^{でんぱ}し、漢字に象徴される共通の文化圏（東アジア文化圏）が形成された、というものである。

この冊封体制論については、現在では、あくまで中国側が「かくありたい」と思ったタテマエや理想の話であり、実現した範囲は限られること、形のうえで成立した場合でも、そこにはしばしば、朝貢する側に貿易や安全保障上の打算があり、中華皇帝の偉大さを称^{たた}える理念を本心から共有したとは限らないことが知られている。しかし朝鮮の諸王朝に関しては、このタテマエにかなりマジメにつきあった優等生とも見られがちである。実のところ、冊封体制論自体、古代朝鮮の事例を中心に構想され、これを一般化した議論という面がある。

③の文化的状況も、大枠としては、事実といえば事実である。

朝鮮史はイケてない？

以上のような前近代朝鮮の王朝国家の姿は、現代人が一般的に国家のあるべき姿として考え

るところに照らすと、ともすればマイナス・イメージを持たれがちだ。

現代の国家は、近世ヨーロッパで生まれた主権国家という考え方をベースにしている。国家は主権（他国から独立して国民・領土を統治する権利）を持ち、主権は他国に侵害されてはならない（主権不可侵の原則）。主権を持つ国家はたがいに対等である（主権平等の原則）。もちろん現実には、人口規模、軍事力、経済力などの違いから、国家間に事実上の優劣の格差が生じることがある。現在の国連で、加盟国が平等に総会投票権を持つ一方、アメリカ・ロシアなど安全保障理事会の常任理事国の意向によって組織的行動が左右されてしまうことは、主権国家が構成する現代国際社会のタテマエと現実のギャップを示している。

それはともかく、タテマエとして主権国家と主権国家は対等であり、それぞれが独立していなくてはならない。こうした現代の原則に引きつけて、冊封関係のように、ある国家（君主）が正面切って別の国家（君主）の臣下になる状況を表面的にながめると、それは主権を制約され、失うこと、すなわち独立国家としての体の喪失、属国化を意味するように見えてしまう。

多くの歴史学者たちは、前近代の冊封関係が、近現代の主権国家間の関係とはおよそ異質なことを承知している。王朝間に上下関係を設定するといっても、たいていは外交上の儀礼的な形式にとどまり、冊封される側の国内統治が積極的に掣肘せいちゆうされるものではなかった（ただ後述するように、すべてをそう言い切ってしまうのも十把一絡げじっばひとからの単純化である）。しかしその

認識が社会で広く共有されているとは、必ずしもいえない。

1 つには、変質した近代初頭の朝中関係のイメージが、それ以前の朝中関係にまでオーバーラップされがちな面もあるだろう。朝鮮が近代をむかえた19世紀末、当時の中国の清は、欧米列強や明治日本がアジアに進出するなかで、朝鮮を自国の勢力圏に引き留めるべく、伝統的な冊封関係の外被をまといつつ内政干渉をおこない、朝鮮を実質的なレベルでコントロール下に置こうとした。朝鮮側でもそのような清との連繋を国策の基軸にすえて激変する国際情勢のなかで国家経営を進めようとする政治グループが生まれた。これは近代をむかえた東アジアにおける新たな事態だったが、朝鮮を清から切り離して自国側に引き寄せたい日本側からは、こうした朝鮮の動向に対し、古くさい伝統に盲従する頑迷な姿勢だとする批判が向けられもした。その残影が現在まで尾を引いている部分もあるように思われる。

一方、中国中心の国際秩序を念頭に、教科書レベルの知識で日本の前近代史を振り返ると、次のような点が印象づけられるかもしれない。すなわち有史以来、他国からの侵略によって独立を失うことはなかった。倭の五王（古墳時代）や一部の足利將軍（室町時代）など、わずかな例外を除き、外交形式の面でも中国の下風に立つことはなかった。わずかに経験した外国からの侵略——鎌倉時代の「元寇」（モンゴル襲来）が最も有名だろう——も見事にはねのけた。当初は中華文明の摂取に熱心だったが、すでに古代の段階でそこから脱却して独自の国風文化を

切り開いた（なおこの見方は現在学界で見直されている）。何よりアジアにおいて欧米列強の植民地・半植民地に転落しなかった数少ない国である……。

さらに世界史教育に目を向けると、そこで圧倒的な情報量を占めるのは西ヨーロッパや中国の歴史である。いうまでもなく、これらは周辺世界に大きな影響力を発揮し、ときに支配を広げた側である。国家・社会の栄枯盛衰を勝ち負けで表現するのも品がないが、あえて俗にいえば、勝ち組の歴史をもって人類史のメイン・ストリームを学んだことにされているわけだ。

歴史に対するこのような目線、すなわち自主独立、独自、発展・拡大、強さを是とする現代人の素朴な「常識的」感覚で朝鮮歴代王朝の国際関係を表面的にながめるだけだと、「日本にひきかえ朝鮮は……」と否定的なイメージにとらわれるのは、ある意味当然かもしれない。

朝鮮他律性論とそれへの反論

戦前期を中心に、かつて多くの日本人はまさにそうだった。大陸の王朝を上位とする秩序にしたがい、中華の文明を尊んできた朝鮮の姿は、その国家・民族に、独立心や主体性、オリジナリティに対するプライドが欠如していることの表れと映った。このような見方で語られた朝鮮人論、朝鮮史論を、朝鮮他律性論という。

なかでも、朝鮮他律性論にもとづく対外関係像を象徴する語が、事大主義^{じだい}である。事大とは

「大国に事^{つか}える」ことを意味し、冊封關係はこれを具体的な実践として形にしたものである。

事大という語は、もともと『孟子^{もうし}』などの儒教古典に由来する。そこでは儒教の礼にもとづく国家間の關係として説いており、決して弱肉強食の論理によって大国に対する無条件の屈従や依存を主張しているのではない。大国の側もまた、事大してくる相手に対し、礼をもって慈しみの姿勢を示して尊重することが求められる（これを字小という）。それぞれが立場に応じた礼を実践することにより国際秩序と各国の安寧とが保たれるというわけで、儒教が説く君臣・父子・長幼といった階層的な道德秩序を国家間の關係に拡張したものと見える。

それゆえ、臣下になるといっても、理念上、大国に好き放題にされることを良しとしているわけではない。そして前述のように、そこで設定される上下關係にしても、現実世界においては、一義的に外面^{そとづら}としての形式であり、事大する側の内心のホンネは別問題である。

しかし事大主義^{じだいしぎ}といった場合、これが形式やうわべにとどまらず、主体性なく他国にへつらい、依存、屈従する姿勢、それを当然として疑問にも思わない精神という、きわめてマイナスイメージになる。朝鮮が中国と続けてきた冊封關係は、まさにそのような精神構造に由来するもので、民族の内面に深く染みついた因習だったとみなされるのである。朝鮮を事大主義の国・民族とする言説は、現在でも一部で形をかえ、あるいはそっくりそのままうけつがれている。

一方、第2次世界大戦が終結して朝鮮が日本の植民地統治から「解放」されると、南北朝鮮、

そして日本の学界では、こうした戦前以来の朝鮮史像に対する批判、反省にもとづく研究、歴史記述が試みられるようになった。それはしばしば、朝鮮の人々が「実は」外国の圧力に抗して果敢に立ち向かった事実、朝鮮の社会・文化に「実は」ほかとは異なる独自性があるという事実、朝鮮の社会が「実は」発展していたという事実を掘り起こす形をとった。

こうした「実は」の列挙は、古いステレオタイプのイメージに対して取り急ぎ1発カウンターのパンチを繰り出すという意味で、一定の意義があったかもしれない。しかし、個別の事例を挙げるだけで全体が証明されるわけではない。「実は」のエピソードがある一方で、多くの為政者が事大外交の形式にしたがつてきた事実、中華文明が尊重されてきた事実などは、そのまま温存される。それどころか、抵抗が潰えた事例、中華文明のほうが優先された事例をつきつけられたとき、かえって古いイメージを増幅させてしまう可能性もある。加えて問題なのは、古いイメージをくつがえすという目的ばかりが先走ると、1つのエピソードに針小棒大な過大評価や、実態からかけはなれた拡大解釈を加えてしまう危険性である。

植民地期の事例だが、1つあげよう。12世紀前半の高麗では、ときの君主仁宗（在位1122～46）のお気に入りだった僧侶の妙清が、王に対し、当時事大の相手だった女真人王朝の金に對抗することを勧める一幕があった。高麗王が金朝皇帝のむこうをはって「称帝建元」、すなわち自ら皇帝を名乗り、独自の年号を立てるべしという主張である。皇帝は、天の命（天

命)をうけて地上に君臨する存在とされるゆえ、月・太陽の運行という天の摂理を反映する曆と、そこで用いる年号の制定は、皇帝のみに許された専権事項とされる。結局、妙清の主張はうけいれられず、最終的に妙清は反逆者となって死んでいくが、この出来事を、20世紀前半の民族運動家にして言論人である申采浩(しんさいこう)は、過去1000年の朝鮮の歴史における重大な分岐点としてクロージアアップさせた(「朝鮮歴史上一千年来第一大事件」)。

「民族の盛衰は常にその思想の方向性(いかん)如何にかかっている」と唱える申采浩には、日本の統治下に生きる同胞に向けて、過去の朝鮮人のなかに自主独立の気概の持ち主がいたことを示すという目的があったことだろう。しかし妙清の企図が挫折したことを一大痛恨事として示すことで、その後も朝鮮が「事大主義の奴隸」となって歴史をたどってきたことを強調する形にもなっている。そもそも妙清の運動は、呪術的(マジカル)な風水図讖思想(ふうすいとしん)で君主の権威を装飾する企てをともなっていた。そのような妙清の志向を、申采浩がいうように「進取的」「独立的」などと評価できるのだろうか。

結局、朝鮮他律性論を批判する者もまた、ある意味で他律性論者と同じ価値観を共有する近代人だったというべきだろう。前近代朝鮮の出来事を近現代の枠組みに引きつけ、自主独立、主体性の要素が欠けるように見えることをマイナスと捉えるメンタリティーは共通している。しかしマイナスの要素を否定したい、プラスの要素を見出(みいだ)したい、という意識が前のめりにな

ると、国際的な背景を無視、または軽視し、自主性・独自性を誇張、強弁する、夜郎自大的な歴史記述を生むことにもなりかねない。

専門研究者の関心

しかし我々、前近代朝鮮の国際関係の探究を日々の仕事としている日本の専門研究者は、独立イコール栄光、服属イコール屈辱という二項対立の価値評価や、朝鮮と某国の関係はそのどちらなのか、などという単純な議論にはほとんど興味がない。そんなことに学術上の意義を見出していないのである。

朝鮮に中国・日本などの隣国があり、そこから政治的、軍事的、経済的、文化的にさまざまな影響がおよんでくることは、昼間、空には太陽があり、日光が放射されているという程度のデフォルトにすぎない。日光は季節や天候によって弱まりも強まりもする。厚い雲にさえぎられ、まるで光が感じられない日もあれば、肌寒いなかで日差しが心地よく感じられる日もある。夏の強い光にあたりすぎて重度の日焼けに苦しむこともある。人間の側も、積極的に日光浴を楽しむ人がいるかと思えば、紫外線を嫌って完全防備する人、本人の好みとは無関係に日光が体にアレルギー反応を引き起こしてしまう人もいる。あるいは遠い未来、発達した科学技術を手に入れて、人間の側が太陽の活動に影響を与えたり、制御したりするかもしれない。

最後のくだりはたとえ話が太陽ではSFにしかならないが、我々が前近代朝鮮の国際関係について関心事とするのは、上記の太陽と人の関係と同じで、さまざまな時代におけるデフォルト（国際環境）の具体的な状態、それに対する朝鮮各時代の国家、集団、個人の、受動的な対応から能動的なはたらきかけまでさまざまなレベルの動き、その結果としてそのときの国際関係に特徴的な性格や構造が相互规定的に生み出され、変転していく動態である。これらを明らかにする作業を通じて、人類の歴史のなかで発生した国際関係をより幅広く、より深く認識する一助とし、そしてそのなかに朝鮮史上の出来事の位置を捉えようとしているのだ。

交通技術が未発達だった前近代において、島国日本は、幸いに多くの対外的脅威から距離を置いて歴史をたどることができた。しかし大陸と地続きの朝鮮は、日本とは比較にならないほどシビリアな国際情勢のただなかに身をさらしてきた。島国の歴史では到底見ることのできない数々の出来事・現象の「豊かさ」と「面白さ」——fun（愉快）ではなく、interesting（興味深さ）——にこそ、学ぶに値する価値がある。そのときどきの人々が、理想と現実の間で揺れ動く姿の、善悪や可否を簡単に割り切れない複雑さ、白とも黒ともいえない濃淡多様なグレーのグラデーション、一筋縄ではいかない「ややこしさ」にこそ、それはあるのだ。